

雑草の名前は牧野流だけではなく変な名前のもいろいろある。我が家の駐車スペースでよく目にする黄色の小さな花を咲かせているのはコメツブウマゴヤシという。コメツブは小さいという意味か。ヒメなになにという名前もよくあるがこれも小さいという意味のようだ。ウマゴヤシは馬が食べて肥えるということの名前にされたようだ。ヘクソカズラという名前をもらったのもいる。葉や実を揉むと臭いからといって屁と糞を重ねなくても良いものを。幸いうちの敷地では目にしていない。同じく目にしていないがその名前のインパクトに気持ち持が持っていない。同じく目にしていないがイメージできないのだが、図鑑によると茎にトゲがたくさん生えていて痛いことから「この草で継子の尻を拭いたらさぞかし痛がるだろう」ということでつけられた名前とある。その説が本当だとしたらなんとおぞましいネーミングであることか。昔話には継子いじめ譚というジャンルがあるようなので、その流れだったのか。

名前だけからするとあまり出会いたくないものが続いたので、うちで見られるめでたい名前のもも紹介しよう。家の周りの園路の際で細長い茎に黄色の小さな花を点々とつけているのはキンミズヒキというようだ。紅白の水引に似ていることからミズヒキと名付けられたものに似ていて黄色の花をつけることから頭に金をつけてもらったのだ。金とくれば銀ということでギンランも。敷地斜面の日陰に白いぷくつとした花を茎の周りに沢山つける可憐な感じの花だ。これは雑草というより山野草のグループというべきか。

雑草は本来植物が生存しにくいところで他の植物との競争を逃れるという独自の生存戦略で子孫をつなぐものという定義にもどって碎石だらけの駐車スペースをもう一度見てみよう。さつきは地面を這うように探していたが、そんなことをしなくても堂々と自己主張してるのがいくつもある。代表格はビロードモウズイカ。これも変な名前だが、全体が白い毛で覆われて手触りがビロードそのものなのだが、モウズイカはイカのような形をしているからではなく毛蕊花と書いて毛深い雄しべの意味だそうだ。春先は大きい葉をべたつと地面に広げた姿なのだがいつの間にか立派な茎が伸びその丈は私の身長より高くなる。黄色い花を茎にびっしりつけるので良く目につく。明治期に観賞用に導入され野草化したそうだが、文明開化にふさわしい新奇な植物として取り入れられたが、やはり日本人の感性に馴染めず野に放たれたということか。もうひとつモンスター系をあげるとすればヨウシュヤマゴボウか。やはり明治期に北アメリカからやってきたようで、ヨウシュは洋種の意味であちら産ということだ。背丈はやはり私と同じくらいになる。花は緑色の粒状の雌しべの周りを雄しべが囲んだだけで花弁はなくそれが房状になる。やがて緑色の実になり熟すと黒紫色になるので見かけブドウのようなのだが、図鑑には食べてはいけなくとある。有毒なのだ。密やかに地を這うものから。でんと異様な姿を見せるモンスターまで野草の世界も多様で興味深い。

